

日 経 文 庫

経済学入門シリーズ

ミクロ経済学入門

奥野正寛著



日本経済新聞社

著者略歴

奥野(藤原)正寛 (おくの・まさひろ)

1947年 東京に生まれる

1969年 東京大学経済学部卒業

スタンフォード大学留学 (Ph. D)

1973年 ペンシルバニア大学客員講師 (~74年)

1974年 イリノイ大学助教授 (~77年)

1974年 横浜国立大学経済学部助教授

現在 東京大学経済学部教授

著書 『ミクロ経済学 I, II』(モダン・エコノミックス 1, 2, 共著, 岩波書店, 1985, 1989)

『日本の産業政策』(共編著, 東京大学出版会, 1984)

『産業政策の経済分析』(共著, 同上, 1988)

『交通政策の経済学』(共編著, 日本経済新聞社, 1989)

『現代経済学のフロンティア』(共著, 同上, 1990)

『日本の政治経済システム』(シリーズ現代経済研究①, 共著, 同上, 1990) ほか

日経文庫 (523)

ミクロ経済学入門

1982年 2月25日 1版1刷

1990年 3月22日 2版1刷

1994年 2月14日 14刷

著者 奥野正寛

© Masahiro Okuno 1982

発行者 田村祥蔵

東京都千代田区大手町1-9-5 郵便番号100-66

発行所 日本経済新聞社

電話 (03) 3270-0251 振替 東京 3-555

印刷 ㈱ディグ・製本 大進堂

ISBN 4-532-01523-5

本書の無断複写複製(コピー)は、特定の場合を除き、著作者・出版社の権利侵害になります。

Printed in Japan

日 経 文 庫

ミクロ経済学入門

日本経済新聞社

まえがき

ミクロ経済学はマクロ経済学と違って、「科学の装い」を色濃く持った学問です。統一された論理体系と分析手法を持っていますし、学派による相違も余りありません。しかし、このため、ミクロ経済学を学ぶことは、ちょうど数学を学ぶことのように、専門用語をマスターし、仮定から展開される論理を追うことであるかのように、誤解されることが多いのです。しかし、経済学とは本来、現実の経済の動きを理解し、よりよい社会をつくり出すための考え方を提供する学問です。したがって、1つ1つの概念には直観的に明らかな意味がなくてはなりませんし、経済学の考え方の背後には、社会や経済に対する見方が隠されているのです。

本書では、ミクロ経済学が、実は親しみやすい学問であることを理解していただくために、数学を一切使わず、1つ1つの概念をできるだけやさしく説明するとともに、現実の経済との対比をできるだけ取り入れるよう努力してみました。また本書では、他書と違って、著者の経済に対する考え方を強く出してみたつもりです。つまり、ミクロ経済学の伝統である市場メカニズムが、なぜ「好ましい」資源配分を行えるのか、という点の説明に加えて、またそれ以上に、なぜ市場メカニズムだけでは望ましい資源配分を行えないのか、という点の説明にも、かなりの紙幅を割きました。

しかし、伝統的なミクロ経済学についても、スタンダードな部分は一応網羅したつもりですし、最近の発展についてもできる限り取り入れるよう努力しました。むしろ、紙幅の制約や能力の限界などから、章によっては、意図と裏逆に抽象的になってしまったところもあるかも知れません。読者の

叱正を待ちたいと思います。

本書は、1979年4月号から10月号にわたって『経済セミナー』誌上に連載された拙稿に加筆し、手直したものです。連載を通じて、日本評論社の堀岡治男さんには激励と助力をいただくとともに、内容についても一方ならぬお世話になりました。また、日本経済新聞社の神山巍さんには、本書の形にするにあたって、文体の統一、索引の作成に協力していただきました。両氏に心から御礼を申し上げる次第です。

1982年2月

奥 野 正 寛

改定版へのまえがき

本書が最初に出版されてから、8年が経ちました。幸い、いくつかの版を重ねることができましたが、その間、現実の経済と経済学がともに急激に変化し、旧版の内容が一部、時代にそぐわなくなりました。そこで、この度大幅な改定を行うことにしました。改定版では、現実の経済の変化に合わせて、事例の内容を大幅に刷新し、経済学の変化に合わせて、新しいトピックを追加しました。

もっとも大きな改定は、新しく、「不確実性と情報」の章を追加したことです。不確実性と情報にかかわるトピックは、この10年ほどの間にもっとも発展した分野ですし、「日本的」な経済システムを理解する上でも、非常に意味のある分野だと思います。それにもかかわらず、残念ながらわが国では、これらのトピックを、やさしくわかりやすい形で説明した書物がありませんでした。改定版では、この分野の重要なトピックを、数式を使わずにできるだけ直観的に説明してみました。とはいえ、この章は、他の章に比べて内容が高度になるため、一部の読者はむずかしすぎると感じるかも知れません。もし、そう感じたら、この章は無理に読もうとせず、経済学の理解を深めてから、もう一度読み直すことをお勧めします。

第2の大きな改定は、各章に練習問題を加えたことです。しかし、文庫という本書の性質上、十分な数の練習問題を収録することはできませんでした。したがって、本来ならいくつかの練習問題を解いて、はじめて理解してもらえなことを、1つあるいは2つの問題に押し込んでしまったきらいがあります。読者は、問題がむずかしいと感じたら、遠慮なく末尾の解答に目を通して下さい。特に、無差別曲線や等量曲線が

折れ線であらわされる問題は、限界代替率と価格比率の間の関係をきちんと理解するのに便利です。しかし、上述の理由で、本書で挙げた問題は単に例題でしかなく、読者が似た問題を自分でつくって考えてみることをお勧めします。また、練習問題のうち、特にむずかしいと思われる問題には、星印をつけました。マークがついた問題は、無理に解かずに、解答を参照して下さい。

今回の改定も、多くの方々のご好意によって、はじめて可能になりました。とりわけ東京大学大学院の柳川範之君には、原稿のすべてに目を通してもらい、数多くの適切な助言をいただきました。いくつかの練習問題の実質的な作者も、同君です。同大学院の本條桂子さんと鈴木豊君にも、本書を読みやすくする上で適切なコメントをいただきました。さらに、東京大学奥野研究室の塔島ひろみさんには、読みにくい草稿をワープロに入力していただきました。最後に、日本経済新聞社の神山巍さんの、暖かい激励とご助力がなければ、怠惰な著者に、このような大幅な改定は不可能でした。以上の皆様に心から感謝したいと思います。

1990年2月

奥野正寛

目 次

第1章 市場メカニズムの機能と限界11

- 1 はじめに11
- 2 経済学とは何か12
- 3 市場メカニズムの原理14
- 4 消費者余剰と生産者余剰16
- 5 市場メカニズムと経済厚生19
- 6 与件の変化と市場均衡20
- 7 弾力性の定義とその意味22
- 8 与件の変化と市場均衡（一般的な場合）25
- 9 市場の失敗—不完全競争27
- 10 市場の失敗—外部効果, 公共財と情報の非対称性30
- 11 分配と公正32
- 練習問題33

第2章 家計の行動と需要曲線35

- 1 家計の行動35
- 2 選好順序と無差別曲線37
- 3 効用関数38
- 4 限界代替率と限界代替率逓減の法則41
- 5 予算制約線43
- 6 最適消費計画45

7	エンゲル曲線と所得弾力性	48
8	需要曲線	51
9	代替効果と所得効果	53
10	価格弾力性と財の性質	57
11	代替財と補完財	58
12	貯蓄の決定	59
13	貯蓄を決める要因	63
14	労働の供給	67
	練習問題	71
第3章 企業の行動と供給曲線		75
1	企業の定義	75
2	利潤最大化と技術の制約	77
3	限界生産性逓減の法則	79
4	費用曲線とサunkされた費用	83
5	限界費用・平均費用	85
6	利潤最大化と供給曲線	87
7	市場供給曲線と生産者余剰	91
8	技術の選択	92
9	長期費用曲線	96
10	規模に関する収穫逓増・不変・逓減	100
11	生産要素の需要と供給曲線のシフト	102
	練習問題	105
第4章 完全競争市場と効率性		109
1	長期市場均衡	109

2 長期供給曲線と外部経済	112
3 均衡と安定	114
4 部分均衡と一般均衡	117
5 交換経済とパレート効率性	122
6 厚生経済学の基本定理	126
7 生産とパレート効率性	130
8 一般均衡のパレート効率性	134
練習問題	136

第5章 不完全競争.....139

1 不完全競争と産業構造	139
2 独占と独占企業の行動	140
3 分断された市場と価格差別	146
4 独占の弊害とその規制	148
5 寡 占	152
6 クールノー・ナッシュ均衡	155
7 独占的競争	159
8 価格硬直性	163
練習問題	166

第6章 市場の失敗.....169

1 市場の失敗	169
2 先物市場と期待	171
3 公共財の概念	173
4 公共財の効率的生産量	175
5 リンダール均衡とフリーライダー	178

6	外部効果と内部化	181
7	外部効果と税・補助金政策	184
8	外部効果と交渉による解決	187
	練習問題	191
第7章 不確実性と情報		195
1	不確実性とくじ	195
2	危険中立的と危険回避的な選好	197
3	不確実性と無差別曲線	198
4	ポートフォリオ選択の問題	201
5	リスク・シェアリング	205
6	固定給制度とモラル・ハザード	210
7	歩合給制度とインセンティブ	212
8	逆淘汰	216
9	自己選択メカニズム	218
	練習問題	225
練習問題解答		227
参考文献		231
索引		235

第1章 市場メカニズムの機能と限界

1 はじめに

経済学は、しばしば無味乾燥な学問だといわれます。とりわけ、ミクロ経済学は、ケインズ経済学を基礎とするマクロ経済学に比べて、抽象的でおもしろくない学問だと思われることが多いようです。おそらくその1つの理由は、経済学の教科書、専門的研究書の叙述が、しばしばあまりに数学的であり、現実の経済とのかかわりが希薄であることによるのではないかと思われます。

また一方、ミクロ経済学は、おそらく社会科学の中で学問体系としてもっとも精緻化されており、その体系の「美しさ」にひかれて、経済学に足を踏み入れる人も多いのです。しかし、このような人は、しばしば現実の経済に対する近似としての、また、政策的インプリケーションを得るためのモデルとしての経済学ではなく、鑑賞対象としての「経済学」に耽溺して、現実の経済問題と学問としての経済学の接点を見失ってしまうことが多いようです。

そこで本書では、ミクロ経済学を、現実に関心している経済問題と関連づけつつ、できるだけ平易に解説することにしたいと思います。本書では、数学的アプローチは一切使いませんが、大学のミクロ経済学の講義で取り扱われる基本的トピックは、ほとんどすべてカバーしています。ミクロ経済学のスタンダードな知識は、本書を読むことによって十分得られるようにしたい、というのが、筆者の願いです。

2 経済学とは何か

経済学、とくにミクロ経済学は、1つの経済において、(1)何をどれだけ生産し、(2)できた生産物を誰にどれだけ分配するか、という問題を探求します。たとえば、私たちが毎日食べる米を考えれば、米を作るためには、最低限、土地と農業労働と種もみが必要です。しかし、土地にせよ労働力にせよ、何も米の生産に使う必要はなく、米の生産量を減らしてもよいなら、それらの土地と労働力は、他の農業生産物の生産なり、工業生産なりに使用することができます。また、種もみにしても、苗付けせずに直接、食料として消費してしまうことも可能です。このようなことを、経済学では生産資源（土地、労働力、種もみ）を、何の生産にどれだけ「配分」するか、という「配分の問題」といいます。

また、同じ米の生産でも、水の多い地方では水田で、そうでなければ陸稲で生育させることができるでしょうし、土地の大きさに比べて農業に従事する労働力が少なければ、トラクターなどの機械を多用して、生産量を上げることができるでしょう。水田にするか陸稲にするか、どのくらい労働集約的農業を営むかという選択を、経済学では「技術の選択の問題」といいます。

一方、生産された米を、どのように分けたらよいでしょう。パンを主食とする外国人には、平均的日本人より少ない量を分ければよいし、育ち盛りの青年には、美容食をとっている女性よりたくさんの量を分配しなければならないでしょう。つまり、異なった欲求・嗜好を持つ消費者に、生産された消費財をどのように分配するかという「分配の問題」を考えねばなりません。

この時、生産資源は、土地、石油の例をひくまでもなく有限な存在です。しばしば経済学が、「希少な資源をいかに使用して、多様な欲求を満足させるかを追求する学問」と呼ばれ

るのは、以上のような理由によるのです。

以下、これら3つの問題——生産資源の配分・生産技術の選択・生産物の消費者間の分配——を総称して、広い意味での「資源配分」の問題と呼ぶことにしましょう。この際注意しておく必要があるのは、資源配分の問題がどう解決されるかは、経済の社会的「仕組み」に依存することです。計画経済を基本とするソ連・中国などの社会主義諸国では、政府つまり計画経済当局がどのような資源配分を行うべきかを指令することで、この問題を解決しています。しかし、このような仕組み、つまり「計画経済メカニズム」では、誰がどれだけの生産資源を持っているのか、誰がどのような技術を持っているのか、誰がどのような欲求・嗜好を持っているのかという「情報」を獲得しなければなりません。また、集めた情報をもとに望ましい資源配分・技術選択・生産物分配を行うためには、大量の情報を処理し、望ましい資源配分を計算するために、膨大な資源が必要です。

これに対して、いま1つの仕組み、つまり資本主義諸国における「市場メカニズム」では、生産者である企業や消費者が自らの私的な利益や満足を利己的に追求することで、資源配分の問題を解決しています。つまり、計画経済で必要となった情報の収集や処理は特に行われず、各個人の利潤追求活動のなすがままに任せているわけです。それにもかかわらず、市場メカニズムは、価格がそれらの情報伝達的手段となって、自動的に問題を解決しています。経済学の創始者アダム・スミスの述べた「見えざる手」です。ミクロ経済学の最大の焦点は、どのような社会的仕組み——資源配分メカニズム——がこれらの問題を解決する上で望ましいものなのか、また、資本主義経済の基本的資源配分メカニズムである市場メカニズムが、どこまでうまく資源配分の問題を解決しているか、また、どこにそのような問題解決の問題点があるかを明らか

にすることにあります。したがって、分析の中心は価格とその役割であり、ミクロ経済学がしばしば「価格理論」と呼ばれるのはこのためです。

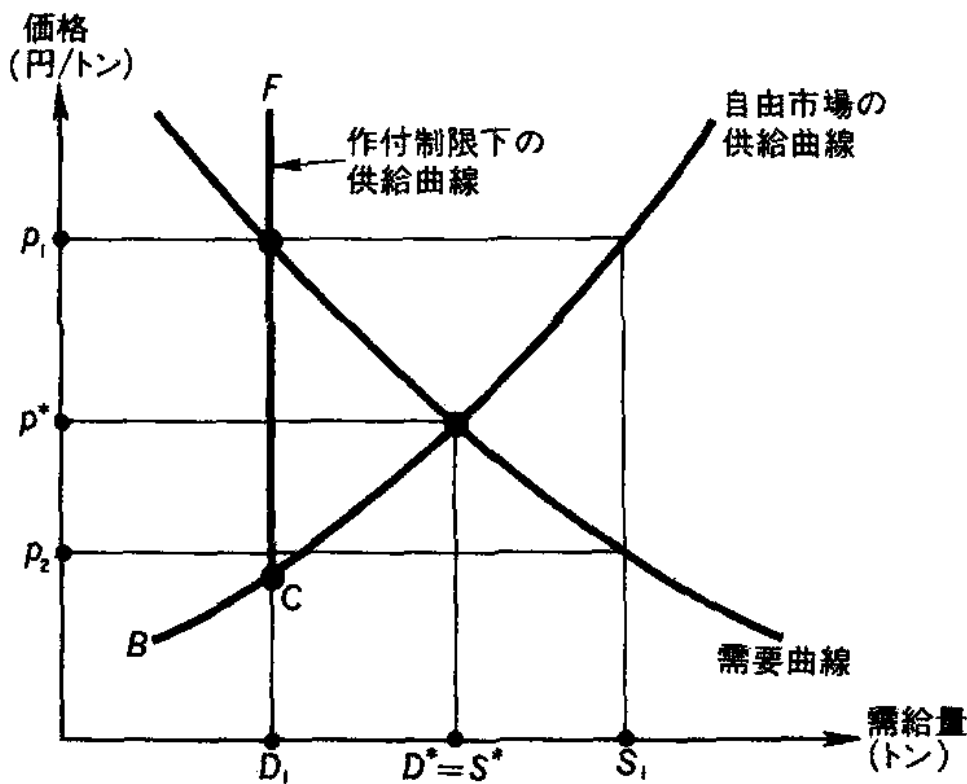
3 市場メカニズムの原理

さて、ミクロ経済学でそれほど重要な意味を持つ「市場メカニズム」とは何でしょうか。また、米価問題、預金利子率などの決定では、政府介入をやめて「市場メカニズム」にまかせようといった主張を耳にしますが、市場メカニズムとは何でしょうか。

市場機構ないし市場メカニズムとは、一般に需要と供給による価格の決定と理解されることが多いようです。たとえば、米の市場を考えてみましょう。米の売り手と買い手を分けて考えると、買い手、つまり需要者は、米の価格が安ければ安いほどたくさん需要しますが、高くなれば代わりにパンや麺類を食べますから、米の需要は減少するでしょう。一方、売り手、つまり供給者は、安い時には売り渋ったり自家消費にまわすでしょうが、高くなればそれだけもうけが出ますから、供給量を増やすでしょう。したがって、1-1図のように、米の価格を縦軸に、米の需給を横軸にとれば、需要量は価格が下がれば増加する右下がりの曲線として、供給量は価格が上がれば増加する右上がりの曲線としてあらわされます。厳密には、「需要曲線」は市場価格とその価格が成立した時に消費者全体が需要するであろう量の、「供給曲線」は価格とその価格のもとで生産者全体が供給するであろう量の関係をあらわしています。

もし、1-1図のような需給の状態があったとして、市場で図の p_1 のような価格がついたらどうなるでしょうか。このような相対的に高い価格のもとでは、 D_1 だけの需要しかないのに S_1 の供給があって、 $(S_1 - D_1)$ の売れ残りが生じてしまいま

1-1 図



す。売れ残った米を持つ農家は、少し値段が安くても売ろうとしますから、価格は低下するでしょう。一方、相対的に安い価格(たとえば p_2)のもとでは、需要が供給を超過し、品切れで買えない消費者は、高い価格を払っても米を手に入れようとするでしょうから、価格は上昇します。

売れ残りも品切れも生じないのは、1-1図の需要曲線と供給曲線の交点、つまり、価格が p^* で、需要(D^*)と供給(S^*)が一致している状態です。このような状態を市場の「均衡」と呼び、ミクロ経済学では通常、市場メカニズムにまかせれば、このような状態が自動的に成立すると仮定されます。この仮定の問題点については、第4章でふれることにします。

さて、市場メカニズムの原理が明らかになったところで、2つの問題を考えねばなりません。第1は、政府の介入や価格統制に比べて、市場メカニズムは本当に勝っているのかという疑問です。第2は、市場メカニズムが勝るとしても、それはどんな場合なのか、またどういう意味で勝るのかという問題です。